



(図1)

# わが地域の民家

## 滋賀県湖北地方の余呉型民家

湖北地方（琵琶湖の北岸地域）には、外観、住居形式ともに特色のある民家がある。地元の郷土史家が、大正時代に湖北一帯の民家を調査し、これを「伊香型民家」と名付けて発表したことから以後「伊香造り」と呼ばれている。この伊香造りは、西浅井町の塩津街道を境にその西側を大浦型、東側を余呉型と分類されている。ここでは主に余呉型の特徴について紹介することにします。

滋賀県の民家は、城下彦根、近江八幡や長浜には町屋、旧東海道や中山道の街道沿いには本陣、商家がみられる。また、琵琶湖岸の集落では、漁家が多くみられる。そして、県北端、福井県境にある栃木峠の街道沿いには、かぶと造りの民家もみられる。

ここでは、私たちの住む湖北地方にみられる特徴ある農家の形式について紹介する。

この地の気候は北に隣接する福井県に近く、天気予報は福井地方で見た方が当たるといわれ、伝統的民家の形式も北陸地方の影響を受けている。

### 余呉型民家の特徴

・外観（写真1）  
 入母屋造り、草葺き、妻入りが多い。入母屋の破風口が正面となるので、「二こに棟端飾りである「前だれ」（写真2）をつけている。この前だれは、棟仕舞をするための締め縄を化粧にあらわしたものと、その締め縄を五本の割り竹で隠すように化粧したもののがみられるが、現在多く見かけるものは割り竹で化粧したものである。破風口は縦板張りしたものが多いが、種々の縁起模様や文字を透かし彫りしたものもある。



余呉型民家の典型的な例  
 (重要文化財・旧宮地家) (写真1)

屋根葺き材は、琵琶湖近辺に生える葦（ヨシ）である。山手では茅（カヤ）を用いることもある。棟覆いは、杉皮をへの字に曲げて葺き、五本の竹で押さえる。この棟覆いも、平野部では杉皮の上に瓦棟を置いたものとなる。

外壁は寒冷地なので山間部では防寒のため土壁の土壁造り（写真3）とするが、平野部では腰を杉板張りとし、漆喰塗りの真壁とすることが多い。



土壁 (写真3)

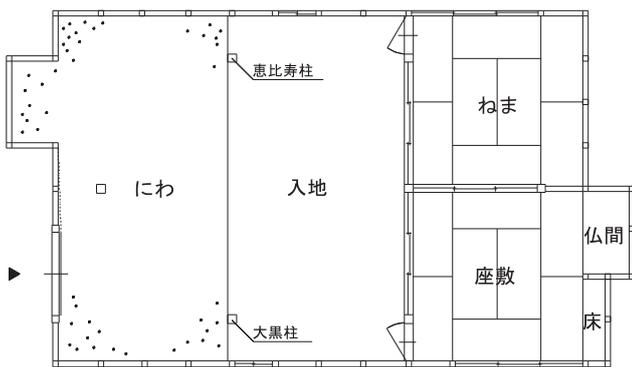


前だれ (写真2)

・平面構成（図2）  
 日本文化の系譜は、大まかにいって南方系と北方系に分けられる。民家の場合も、表日本型（南方系田字型）と裏日本型（北方系広間型）の二つの系譜がある。

表日本では、温暖な気候から二毛作が可能なので専業農家が多く、また屋外作業も自由なので建物を棟を分けて配置し作業をするようである。

これに対して裏日本では、米の単作地帯であることが多いことから養蚕等の副業農家が多く、積雪、降霜もあることから、広い屋内作業場が要求され、広い土間をもった広間型プランが多いといわれる。



重要文化財 旧宮地家住宅平面図 (図2)

湖北地方も豪雪地帯であることから、広い土間を持った広間型（広間型三間取り）が多くみられる。

この地方に独特の入地（にゅうじ）（写真4）といわれるのだいどころ土間（土座）がみられるのもこの広い屋内作業場が必要とされたためだろうか。

この広間型三間取りも時代がすすむと、広間の土間が上げ間（床を張ること）され、分割され、整形の四間取りに変化してゆく。

・間取り 広間型三間取り

間取りは、入口を入って、土間のいわ、入地、板張りまたは畳敷きの座敷とねまからなる。にわと入地の境は建具はなく開放的で、天井は竹すのこ天井である。

入地は、地面を掘り下げて粗殻（もみがら）を入れ、その上にむ



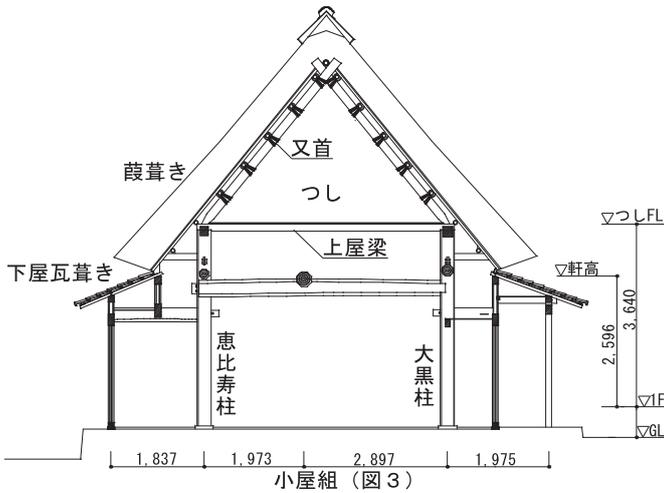
入地(写真4)

しろを敷いている。湖北の厳寒の冬季、大変暖かいとのことである。入地は衛生上好ましくないというので、昭和初期から上げ間され、徐々に板張りになっていく。

入地の奥に座敷とねまがあり、床高は三〇センチ程度上がる。代表的な例として、重要文化財の旧宮地家がある。長浜市国友にあった住居で、現在は「近江風土記の丘」へ移築、保存されている。（写真1）

・架構

にわと入地の境に、二本の太い上屋柱を立て、それぞれ大黒柱と恵比寿柱と呼ぶ。大黒柱と恵比寿柱の間に梁を架け、その梁に十字に交わるように桁行方向に梁を



小屋組 (図3)

架け、柱のない空間を作っている。大黒柱は主にケヤキが用いられ、他はヒノキ、杉が用いられている。大黒柱は常に美しく磨き込まれ、その太さとともに家の中心的存在となっている。

・小屋組

二本の松丸太で三角形に組む合掌造りである。おだて（棟木を支える垂直の柱）はみられない。（図3）

伊香造り民家の現状

伊香造り、余呉型民家の特徴は、以上記述した内容であるが、その民家の原型どおり現在まで住み継がれるはずもない。三間取りの周囲に庇を取付けたり、入地部分を上げ間して畳、又板張りし、増床して時代の変化に対応してきた。

またツシの合掌部分を撤去し周囲に柱を建て、二階を継ぎ足す（当地では継家と呼ばれる。）（写真5、6）ことで不足する床面積の充足が行われるケースもある。

未だ住居として存在する余呉型民家はこのような改修が行われても、時代の変化に対応できず、次々と姿を消しているのが現状である。

当地でも草葺き民家は「くず家」と呼ばれその呼称は「暗くて寒い住みにくい家」を連想するものとなり、そのことが草葺き民家を住み継ぐことの気恥ずかしさともなっている。

継家前の外観(写真5)

継家後の外観(写真6)



文化の結晶ともいえるこの湖北の民家が十分に評価され住み継がれていくことを願っています。

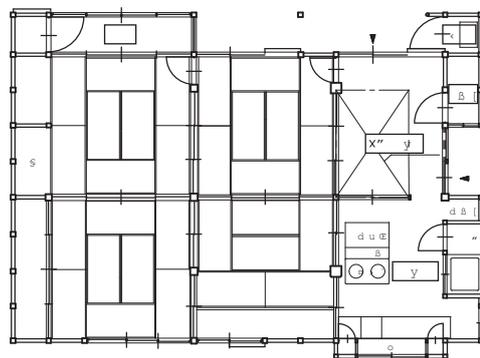
### 再生事例(1) 伊香造り民家を高齢者福祉施設 内へ移築再生する事例

私たちが最近取り組んだ伊香造り民家の再生事例を紹介する。

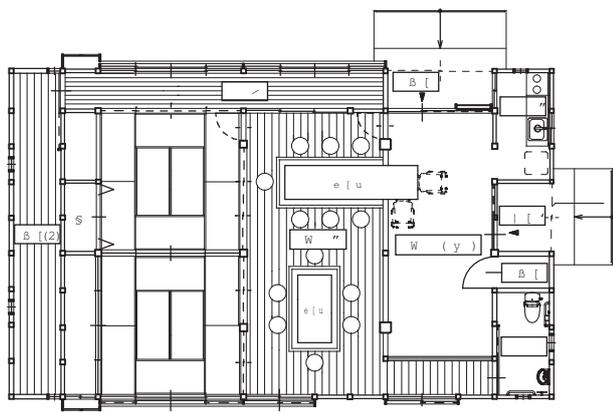
事例民家は余呉町中之郷にあったもの。(図4)

これまで建築されてきた高齢者福祉施設は、巨大で複雑であり、高齢者がそれまで生活してきた居住の空間スペースをはるかに逸脱した建物となっています。

又、立地の面では、市街地より遠くはなれて建設されることが多いため、地域の人々との交流は難しく、「閉じた生活」になりやすいといえます。「外に開かれた生活」つまり、家族、友人が気軽に訪ねられ、地域の人々・隣接する集落の人との交流を可能にする場として、「移築民家」は位置づけられ彦根市内で移築再生される。(図5)



移築前平面図(図4)



移築後平面図(図5)

### 再生事例(2) 長浜市内にある古民家の再生

主屋は一八六一年(文久年間)以前に、現在地に移築建築されていることから、今回の現地再生工事を含めると、過去二回の再生工事を経験した稀有な民家再生事例である。

再生前の主屋の屋根は葺葺きで大変美しい姿をしていた。その葺葺き屋根の維持管理が限界にきたというところで、今回水まわりを含めて全面改修工事を行っている。

(写真7・8)



(写真7)



(写真8)